

新型コロナと
向き合う
保育現場

新型コロナウイルス感染症の終息が見えないなかで、現場は、感染防止対策に取り組みながら保育を継続しています。

「元気っ子バンザイ 2021」を特別編として、新型コロナウイルス感染症拡大のなかで、保育所・認定こども園がどのような対応をしているのか、どのような思いで保育に取り組んでいるのかなどをお伝えしていきます。

なお、訪問取材を実施することがむずかしいことから、WEBによる取材を行っています。また、写真も取材先の園より既存のものを提供いただき掲載しています。



保育士のまねをして、泥だんごを作っています。

晴れの日の保育は、青空のもと

埼玉県のほぼ中央にあり、首都圏50キロメートル圏内に位置する鴻巣市は、都心のベッドタウンとして便利な中核都市です。鴻巣駅から10分ほど歩くと、たどり着くのが、まごやま保育園。園の自慢のひとつは、むかし広大な雑木林だったという園庭。今でも大木が何本も根をはっているそう。

「あまりに樹木が育ちすぎて、少し伐採したら、秋に庭にどんぐりが落ちなくなってしまうって。まあすぐ近所で、どんぐり拾いはできるのですが」と、樋上雅人園長は笑います。

1974（昭和49）年の開設当時から、子どもと自然とのかかわり合いを大切にしていた保育を実践している同園。コロナ禍のなかでも、この園庭のおかげで、泥んこになってあそぶことが可能です。テラスに飾られているというピカピカに磨かれた泥だんごは、子どもたちが日ごろから、自然の中で工夫したり、集中したりして作り上げた結



菜園で採れた野菜を調理しています。



菜園の大根を収穫しています。



異年齢（写真は0歳児と2歳児）の交流がしぜんに発生します。



リズムあそびの「あひる歩き」。



ターザンごっこ。
黄色いゾウさんの
スベリ台から、
ロープにまたがっ
て飛び降ります。



桜の木に下げられ
た、職員手作りの
ブランコに乗って
あそびます。

園を包み込む自然は みんなの宝物

園にきた荒馬座（東京の
民族歌舞団）の前でハネ
トの踊り（青森ねぶた祭
の踊り）を披露しました。



晶です。

現在の外あそびのブームは「ターザンごっこ」。すべり台のてっぺんに登ってから、大きな木に吊るされたロープにぶら下がります。子どものチャレンジしたいという気持ち尊重し、おとなが常に目配りすることで、大胆な自然体験も「危ないからダメだ」と押さえつけることはしません。ていねいに見守る保育が、健やかな育ちのベースです。

しかし園にとって、コロナの影響は決して小さくはありませんでした。現時点で職員や園児の感染はありませんが、ふりかえると、昨春の緊急事態宣言時には、市の方針で1か月以上の臨時休園に。医療従事者などの家庭を除き、ほとんどの子どもたちが登園自粛になったことで、イベントの多くが縮小や中止になりました。

樋上園長は「4、5月にいろいろな経験をさせてあげられなかったのが、つらかった。だから、今しかできない体験をひとつでも多くさせてあげるため、日々工夫して深く考え続けるようになりました」と話します。

感染予防対策はもちろん、リズム運動などは人数を分ける。そしてリズム運動はもちろん、お誕生会や荒馬踊り（東北地方（津軽半島）の踊り）など保育室で行っていたことを園庭で実施して、青空保育で密を避ける。そんな手探りだった保育のなかでも、子どもたちと草むしりをしたり、虫を触ったりしながら育てた園庭の菜園では、さつま芋やピーマン、モロヘイヤなど、多くの実りがありました。とくに大根は、例年よりずっとしつかりした、大きな物になりました。

また運動会は時間を短縮しつつ、子どもたちが達成感を味わえるようにと、保育士たちが工夫して奮闘。短縮のなかでも例年のような子どもたちの一生懸命チャレンジする姿や笑顔を見ることができたそう。

こうした状況のなか、園長が本当にすごいと感じているのは、現場の職員たちのスキルやがんばりだといいます。

「消毒などの業務が増えるなかで、いつもどおりに、みんなにいてねいに向き合ってくれています。また子どもたちと一緒に楽しむつもりで、太鼓なども練習して



暖かい日は園庭で食事しますが、コロナ禍で、向かい合う子どもと距離をとって食事をするようになりました。



毎朝の話し合いで、あそびを決めます。



納涼大会で、職員が「ぶち合わせ太鼓」(神奈川県海南神社の祭礼で演奏される太鼓)を披露しました。

取材日：令和2年12月25日（金）

取材協力

まごやま保育園(私立)

〒365-0055

埼玉県鴻巣市栄町7-24

電話 048-542-5002

定員90名

写真提供／まごやま保育園

文／編集部

いました。そうやって明るく働いてくれている職員たちは、園の誇りです。こんなときだからこそ、人と人のかかわりを大切にするという基本に立ち戻って、よりよい新しい保育を実践していきたいです」(樋上園長)。

広くて自然がいっぱいの園庭に出て、青空のもとの気持ちのよい保育ができたり、徹底した手洗いなどの習慣でこの冬はインフルエンザや胃腸炎がゼロだったり、コロナ禍でも、よいことがたくさんあるのは「できる限り、子どもたちのために」という、おとなたちの気持ちのおかげです。ここでの新しい保育の道は、子どもたちのよりすてきな未来に向かって、開いていくはずですよ。